東奥日報社提供

東　奥　日　報
2019年（令和元年）12月11日（水曜日）（17）

岩木川水害に備えを

ヒロロで「津軽の水討論会」

弘前

「津軽の水公開討論会」が3日、弘前市のヒロロ駅前市民文化交流館ホールで開かれた。約80人の参加者が岩木川水系の防災や減災について考え、非常時に向けた心構えを新たにした。

NPO法人岩木川と地域づくりを考える会（会長・佐々木幹夫八戸工業大学大学院教授）が主催した。佐々木会長が「ダムの効果と川の役割」と題して講演。近年、過去に経験したことのないような大雨で、ダムの緊急放流を余儀なくされるケースがあるが、ダムが満水になった場合でも、放流の仕方によっては洪水調整能力を生かして放流量を大幅に減らすことができることを紹介した。

国土交通省青森河川国道事務所の嚴倉啓子所長は、岩木川で想定される水害のハザードマップを示しながら、浸水域が弘前の市街地など広範囲に及ぶ可能性があることを指摘し、日頃からの心構えの重要性を強調した。

「災害に備える、自分の身を守る！」と題したパネルディスカッションでは、弘前市の赤石仁総務部長、弘前市防災マイスター連絡会の相馬勝会長、FMアップルウェーブの気象予報士長尾純一さんらが防災への取り組みを紹介した。

このうち、連絡会として自主防災組織の結成や育成を支援している相馬さんは、弘前市の世帯カバー率が24・6％で県内の自治体の中でも低いことを指摘。パネリストたちはそれぞれの立場から取り組み強化を提言した。（外崎英明）

岩木川水系の防災や減災について考えた公開討論会